『農夫ピアズの夢』における無学な下層階級の救済

田巻敦子
池上忠弘

序

十四世紀後半のイングランドで、詩人ウィリアム・ラングランド William Langland によって書かれたとされる夢物語詩、『農夫ピアズの夢』*The Vision of William concerning Piers the Plowman* では、作品の性格についてはまだ研究が続けられているが、作品の主題についてはだいたい意見の一致がみられる。それは「いかにして魂が救われるか」の問いに対し、「真理（神）に従え」と答える形で展開する魂の救済のための真理探求の方法といわれ、最終的にはキリスト教徒として完全であること、即ち完徳にまで達するように追求したものとされている。

モートン・ブルームフィールド Morton W. Bloomfield は一九五八年の論文で、[1] 完徳は古来よりいろいろな比喩的テーマで表現されたと述べ、『農夫ピアズ』では「貞潔」がテーマになっていると指摘した。そしてキリスト者が完全に至る過程を、結婚→やもめ生活→童貞、または貞潔→禁欲→童貞、後に平信徒→司祭→修道士の三段階で表わし、この組合わせが作品中ピアズを通して織りなされてい

ると述べた。[2] 以上のことは彼がラングランドの思想の背景に修道院思想があると確信し、その線をたどることによって導き出されたものである。

従来修道院は祈禱と学究を行う処で、例えばクリュニー派修道院のように主として修道士は貴族階級出身者を背景としており、社会的には上層階級に属すると考えられていた。こうした階級にとって、「貞潔」は伝統的かつ妥当な完徳のテーマであったと思われる。しかしラングランドが救済しようとしていた対象は、このような階層ばかりであったのであろうか。ブルームフィールドはこの詩の基本的な論点を「いかにして己れの人間性の限界の範囲で出来る限り完全になるように生きられるか、いかにして罪から救われ神に救われるように自分自身を導かねばならないか」[3]としており、自分で自分の魂の救済を行える人々を前提に考えている。ところが『農夫ピアズ』には、十四世紀後半におけるイングランドとおぼしきあらゆる階層の人々が登場して救済を求めているのである。

この作品には一つの問いに対し二通りの答えや正反対の方法が出てきたり、神学上相対立している教義が両方とも含まれていたり、このラングランドの矛盾については多くの研究者が悩まされてきた。[4] これを例えば詩人が救済の対象をいくつか設定していて、各々ちがった救済方法が述べられていると考えてみてはどうであろうか。アナ・ボールドウィン Anna Baldwin は社会共同体の支配者（国王）と共同体のメンバー（王の従臣とキリスト者達）との二層に分けて考えている。[5] 一歌八二行に主人公の Dreamer が〈聖なる教会〉に向ってする、「いかにして魂が救われるか教えて下さい」との問いに対し、無知なる者と教育ある者とに分けた二通りの答えが出されていることに留意したい。このような箇所を全文から拾い出し、二種類の対象を整理してみると、

1、無知で無学な者に対し、教育があり学問がある者。
2、生れながらに真理を知る能力に欠ける者に対し、目に見えないものを認識できる能力を備えた者。
3、知恵に欠ける者に対し、知恵ある者。
4、自分で自分の魂を救い出せない者に対し、自分で自分の魂を治め罪から救い出せる者。
5、宗教的信仰に入る場合、指導者から指導される必要ある者に対し、人々に説教し人々を愚行から救い出し徳行へと導く者。

となる。

聖書と教父たちの著作に典拠する用語に、「愚か者、賢い者」[6]という言い方がある。この作品でもよく出てくるが、九歌八三行にパウロの言葉、「あなたがたは賢い人たちなのだから、喜んで愚か者を忍んでくれるだろう。（コリント後書11の19）」が引用されている。また、アウグスチヌスは神学論文『信の効用』で、「すべての人が愚者か賢者のいずれかであることは疑う余地のないことである。賢者とよぶのは、人間自身と神とについて明確な認識およびこの認識にふさわしい生活行動を身につけている人間である。愚者は自分の判断で生活するよりも賢者の教えに従う方がいっそう有益かつ健全である」[7]と述べている。パウロもアウグスチヌスも宗教的信仰に入る場合の指導される者と指導する者との関係という観点で用いており、これを決め手とし、前者を「愚か者」に、後者を「賢い者」に定義して考えることにした。

そこで、㈠十四世紀後半のイングランドにおける愚か者の階層について調べ、㈡愚か者の救済の伝統を探し、㈢愚か者の救済方法を述べ、そこから完徳の比喩的テーマは何かを導き出してみようと思う。本論の目的はあくまでも上述の考えに基く試論を提示することにある。

なお、『農夫ピアズ』にはA・B・Cの三種類のテキストがあり、中でもAテキストは最も短いものである。これについては、BテキストはAの拡張、CテキストはA・Bの改訂であるとし、Aテキストのアイディアに基いているのでAテキストは原型として最も重要であるとされた。[8] Aテキストは作者の当初の創作意図が最も明確で、とくに構想をもって書かれたことがわかる。A・B・C各々のテキストはそれが書かれた時期に対応して内容に多少の変化が認められており、本稿ではAテキストとそれが書かれたと推定される一三六二年頃を中心に論考している。使用したテキストは、英国ケンブリッジ大学トリニティ・コレッジ写本R・三・一四に基くジョージ・ケイン George Kane 編の校訂本、*Will's Vision of Piers Plowman and Do-Well* である。[9] なおBテキストは、W・W・スキート版 W. W. Skeat (ed.), *The Vision of William concerning Piers the Plowman in three parallel texts*. 2 vols. Oxford, 1886, rpt., 1979 を参照した。[10]

一　愚か者と時代背景

十四世紀後半のイングランドにおける愚か者とされる階層はどういう人々か。この作品の「序歌」には、実際にその頃のイングランドの下層社会を構成した人々が登場する。

「パン屋、肉屋、ビール醸造業、料理人、居酒屋の主人」など「不正直な商売で収益を得ているこのような商売人（Ⅲ・70）」

「羊毛織工、リンネル織工、洋服屋、縮絨工」など「仕立屋、靴屋、自ら暮らしをたてることができるあらゆる種類の職人たち（XI・185）」

「耕作に励み、草木を植えたり種播きをしている」「この世にいる正直な耕作者や羊飼いたち（XI・185）」

「溝掘り人夫、穴掘り人夫、石工、鉱夫」など「暮らしを立てる土地がなく、両手を使って働く以外にない日傭い労務者（VII・292）」

「大道芸人、講談師、乞食、浮浪者」など「賤しい人々（Ⅲ・234）」

そして、十一歌三一〇行に「農夫、羊飼い、靴直し、裁縫師、……このような無学な下層階級」とある。当時、これらの階層の社会的背景はどのようなものであったか。

一三四八―九年における黒死病の流行は画期的大事件で、イングランドの社会経済機構を大きく変える転換期になった。通説によると人口の三分の一、労働人口にすれば半分を失ったといわれる。農村では耕作者を失った耕地が放置された。これを機会に領主との苛酷な支配関係から逃れ、自由を求めて領地から逃散する農奴が続出した。この農奴の逃散は、十四世紀末まで慢性的に続いたといわれる。[11] 彼らの行先は何処であったか。農村には一方に、耕作者のいなくなった土地を耕して自分の地条を増やし、羊毛産業を兼業に経営規模を広げていた農家があり、そこに日雇い又は常雇いで雇われていく者、手工業ギルドの親方の許に徒弟として住込む者などがいた。毛織物工業はただ一種でなく多くの手工業――刷毛、紡毛、織布、縮絨、染色、仕上げ――が必要で、徒弟は年期を終えると職人になった。[12] またこの時期の特徴に市場の発達が挙げられる。商取引の必要から各地で定期市や聖人の祝祭日が盛んになり、飲食小屋や余興にたずさわる大道芸人、講談師、〝マーケ

ットへの案内業〃などといった新職種が増えた。また修道院の周辺で乞食になる者も多く、中世では人間に善行をさせる存在として乞食にある種の職業的価値が認められていた。施しの償罪行為によって癒やされる罪が多かったからである。とくに修道院ではどこでも多量の乞食、浮浪者を養っていた。[13]

これらの職種の者たちも、また彼らを雇った者たちも農奴と同じ身分であり、マグナ・カルタで保証されていない階層[14]である。繰返し起る農奴の逃散と暴動の結果、土地から遊離されてくる農民も加わり、貧民層は漸次増加していった。[15]

トレヴェリアン G.M. Trevelyan の叙述によれば、「農奴は、貧困と屈従によってつくられたものである。彼らは不正直で、物おじし、無知で、キリスト教や異端の迷信に満ち、非常に古い民間伝承の呪いや奇妙な伝説を信じた。領主や役人たちを欺き、ときには彼らを殺した。そして村での食糧難と疫病や、世話の行き届かぬ家畜の間の伝染病に直面して無力になり宿命論的になっていた。[16]」とある。

これらの階層が〃不正直〃で、嘘をつき、ごまかしとペテンで稼ぐ者たちであったことは作品の随所にあり、とくに五歌における民衆の告白の内容からも察せられる。多くが〃怠惰〃であったことはこれまでにもよく指摘されてきたとおりである。無為に放浪する者、怠惰で働かない者、飲酒に浸る者、物乞いで暮らす者、これらの者たちは飢えれば強盗になり、暴動に混じては暴徒と化した。国内の治安と風紀を乱し、救いようのない終末的状況を呈していたのである。「人里離れた荒野に育った野性の動物のように粗野で分別なく、鞦(しりがい)もつけずに馳けまわる[17]」者たち、「天国に対しては異教徒、その魂は未だ救われていない[18]」者たち、ラングランドが救済しようとしていた対象は、まず第一にこうした無知な下層階級であった。

一方作品には、これら無知な下層階級に説教し、愚行から救い出し賢くなるまで助ける義務が課せられている者として、「賢い者」が設定されている。本来ならばそれは教区司祭、聴罪司祭、礼拝堂付司祭などと四つの修道会に属する托鉢修道士たちであった。しかし彼らを含めて聖職者はこの時期、本来の使命を忘れて腐敗堕落しきっていた。彼ら自体また救済される必要があったのである。そのことは別の機会に論ずるとして、本論では無学な下層階級の救済について考えてみたい。

二　愚か者の救済の伝統

それではラングランドは、無学な下層階級の救済をどのように行おうとしていたのであろうか。こうした困った状況におかれ、改革の必要が生じたとき、指導者たちはきまって解決の方法をカトリックの教父たち[19]の著作や生活の規則、それを基にした修道会戒律などカトリック教会の伝統と習慣の中に探されるのが常であった。そのことは十歌九一―四行に述べられてあり、ラングランドもその範囲を超えていない。この場合はとくに愚か者の救済を心がけた神学者と修道会に解決策が探されたことであろう。

そこで十二世紀の神学者、クレルヴォーのベルナルドゥス[20]の名が十一歌四一行に出てくるのであるが、ベルナルドゥスは「賢者にとって十分であるだけでなく、愚か者にとっても十分であるように注意した[21]」修道院長である。彼は修道院の中でもとりわけ厳しいと言われるシトー会修道院で厳しい生活をしながらも、争いのあるところに平和をもたらし、不正を正した。浮浪者に定住と勤勉の手本を示し、荒地を耕し、排水工事をし、農耕技術を改良し、生活水準を向上させ、著作や説教によって国家社会の文化向上に尽くした[22]。ラングランドは、愚か者救済の構想をこの周辺に探したと想定される。

ベルナルドゥスの思想の特徴は、論文『神に対する愛について』の中に次のように述べられている。「人間は霊魂と肉体との二つの要素から成り立っている。……然しながら我々は肉体的なものであり、肉体的欲望から生れるので、我々の欲求あるいは愛が肉体から始ることは必然である。それはもし正しく順序づけられると恩恵の指導で然るべき段階に進み、ついに霊によって完成されるのである[23]。」そしてこの上昇の過程を四段階で説いた。第一は肉体の段階で、人は自分自身を自分のために愛する。第二は魂の段階で、信仰によって神をあたかも自分に必要なもののごとく求めかつ愛し始める。第三は霊の段階で、しばしば神に接し始めたら少しずつ神が知られ甘美なものとなってくる。こうなると神を自分自身のためにではなしに神のために愛するようになる。第四は天国で成就する段階とされている。

人はどうすれば救われるかの問題は、アダムの堕落によって人間の意志は全く腐敗しており、救いはただ神の恩恵

によって選ばれた人間にだけしか臨まないとする特殊的恩恵説と、人間は自分の努力によって神の意志に協力することによって救いに達することができるとする普遍的恩恵説とがある。[24] 前述の論文でもあきらかなように、ベルナルドゥスでは後者の立場がとられている。人間は肉体にいる間は、神から遠く離れて天国への道をたどっており、それは自己愛から始まり、自覚を経て神との一致に至るまで続く内的運動であること、[25] 各段階はその前にあったものから知的発展によって進んでいく上昇であること、あくまでも自分の意志で観念による神と感覚的一致を得る、これが人間の霊魂の達すべき最高段階としているからである。[26]

この考え方が後にシトー修道会で体系的に企てられて、「肉体の段階」「魂の段階」「霊の段階」から成る「シトー会の計画（プログラム）」[27] とよばれるものになった。『農夫ピアズ』にも、

キリスト教徒には段階があるとは、よく言われていることです。（XI・240）

はじめに善行を、ついで次善行を習い、その後で至善行をある程度知るように。（XI・180）

とあり、作者が救済の過程を三段階に分けていることがわかる。

こうした魂の救済、即ち完徳に至る過程を段階でもって表わすことは、中世の神学者の霊的著述全体にみられたことである。[28] しかし他の著述家が完全に至る上昇だけを論じたのに対し、ベルナルドゥスの場合は行状によっては下降をたどることもあるとした。そして完全な状態から堕落させる愚か者の心理状態と引離す障害となったもの、例えばつまらない好奇心とか――に関心をもち、それを防ぐ方法をこうじることにあった。一歌一一〇―九行の、ルシフェルと彼の軍団がいったんは天国に達しながらただ一度傲慢の罪を犯したばかりに地獄へ勢いよく落ち込んで行く箇所に、この思想の反映がみられよう。

ベルナルドゥスは賢い者のことは勿論であるが、無知文盲の愚か者の救済を心がけた修道院長であったから、彼の思想の影響をうけてシトー修道会には独得の思考方法が生じた。例えば修道院の三つの伝統的務めである祈禱、学究、手仕事について、ベネディクト修道会では主として書物と文献の学究的仕事を奨励したが、シトー修道会の場合

は土地の開墾、耕作を推奨した。そして教会の宗教的儀式の達成と同じ水準で労働に祈禱と同じ価値と尊厳があると考えられた。[29] これはシトー会独自のものである。

また聖ベネディクトの会則の完全な遵守をモットーに、規律の弛緩を防ぐ方法が制度化された。これはとくに効果があったので、多くの修道院が模倣したものである。[30]「巡察」[31]、「修道院総会」[32]、「告白集会」[33]など、なかでもシトー会を最も特徴づけたのは修道士 monk と労働修士 lay brother から成る二階層制度である。[34]

労働修士は大部分が近辺の種々の下層階級から集められた無学な者たちであった。彼らは修道院生活法で規定されているが文盲であったから、短い簡単な祈り（主禱文、天使祝詞、栄唱）を唱える義務だけで、主に修道院の野外の労働に従事した。[35]

『農夫ピアズ』十一歌三一〇行に、「農夫、羊飼い、靴直し、裁縫師……このような無学な下層階級の人たちこそ、短い主禱文を一回唱えるだけで天国へ昇っていくであろう。」とある。ラングランドが十四世紀後半のイングランドにおける無学な下層階級の救済を考えたとき、このシトー会修道院の中で短い主禱文を唱えて働いていた労働修士の存在が念頭にあったのではないかと思われる。

イングランドではシトー会は十一世紀から十三世紀にかけてヨークシャー帯に隆盛で、よく管理された厳しい労働で荒れ果てた原野や荒地を開拓し、最も羊毛生産の高い地域に沿って巨大な農場や収集地の組織を作り栄えた。一一五三年には全島に一二二、一二〇〇年には約七〇の修道院を有していた。イングランドの荒地を牧羊地に変える開墾運動や沼地の干拓法、上質の羊毛を産する所領経営、帳簿づけと記録の方法等を最初にもたらしたのはシトー会であり、農法の多くに教訓を受けた。[36]

三　愚か者が完徳に至る三段階

当時の民衆の宗教はといえば、秘蹟に専ら依存されていた。[37] とくにこれは無学な下層階級にとっては重要な意味をもっていたと考えられる。悔悛の秘蹟は強制的義務で、普通は教区司祭にむかってしたが、なかには托鉢修道士の処へ行く者もいた。[38] 一対一で行われ、糾明→痛悔→遷善の決心→告白→罪の償い→罪の赦しの手順をとり、正しく行われるならば非常に効果的な指導法であったと思われる。

『農夫ピアズ』において愚か者を回心[39]に導く際にもこの過程をたどっており、五歌から八歌にかけて展開されている。これをシトー会の方法にならい、「肉体の段階」「魂の段階」「霊の段階」の順で追ってみることにする。

愚か者の救済の第一段階は一歌に見出される。

愚か者よ、お前は頭の鈍い男ですね。お前の心の中で、お前自身よりもっと主を愛するように、たとえお前が死なねばならないことがあっても、罪源を犯さぬようにと教えるのが天性の認識なのです。（I・130―132）

教義には当時、文盲の民衆に教えられていたキリスト教の道徳律〝七つの罪源〟が用いられている。地獄の恐怖はもっとも効き目があり、説教者や聴罪司祭は罪びとを悔い改めさせるためにもみな、これを利用した[40]。人間は死後、キリストによる裁きを受けて生前の行いにより天国へ昇るか地獄に堕とされるかに分けられる。傲慢、邪淫、嫉妬、貪欲、貪食、憤怒、怠惰、これらの罪源を犯した者は地獄へ堕とされる、と説かれた。そして黒死病の流行は罪源を犯したため、土曜の夕刻に起った南西の暴風雨も傲慢のためと身近な出来事を例にひき、神の仕業を畏れさせる[41]。

そこで人々に生活の中で犯している罪はないか、自己認識させることからはじめる。すると手工業者や商人たちが競って罪の告白を始める。商品を売らんがために利益をはかって嘘をついたこと、不正直な目方の測り方、手間賃の計算のごまかしなど罪源にふれること全部。告白が済むと民衆が群り集まってきて自らの悪行を悔いて泣きわめき嘆き悲しみ、十字架上のキリストを仰いで罪の赦しを乞う。

作者はここで、ぶらぶらと歩き廻り無為に過ごしている人々、浮浪者や乞食に、それを止めて何でもよいから自分の一番よく知っている仕事をやってみるようにすすめる。当時の民衆の生活の中にあるとくに両手を使ってする仕事がよい、畑を耕すこと、溝を掘ること、穴を掘ること、洋服の仕立や靴作りなど、それらの仕事をして生活の糧を得るようにとすすめた。それは金銭を得ることであるが、決してやましいことではなく、聖書にも、「働く人には、報酬は恩恵としてではなく、当然の支払いとして認められる。（ローマ人への手紙4の4）」とある。「労働者や賤しい人人が雇主から受けるのは、報酬ではなく正当な労賃であ

る。(Ⅲ・235)」しかし物乞いはいけない、困窮していないのに物乞いをしている者は托鉢する者も含めて、永遠の命に救われないと厳しく抗議している。

悔悛の秘蹟の手順では、告白を行うと司祭は罪を赦すと同時に罪の償いを命じる。第一段階と第二段階をどこで区切るかむつかしいが、罪を赦され、償罪を要求されるところで一つの段階とされたのではなかろうか。なぜならば「〈善行〉は神を畏れることにあり、〈次善行〉は耐え忍ぶことにある(X・129、215)」とあり、第二段階は耐え忍ぶことが特徴とみられるからである。

第二段階の教義は八歌に見出される。

免償と罪の償いと祈禱は、たとえ罪源を七度犯したとしても魂を救うものだと私は固く信じている。(Ⅷ・160—162)

従って過去に犯した罪の償いをせよと教える。償罪行為には断食、祈禱、巡礼、苦行、寄進、善行、施しなどあったが、ここでは〝巡礼〟ではなく〝半エーカーの土地の耕作〟[42]が命ぜられる。イングランドでは十二世紀以来の農法で、開墾による畑は半エーカー又は一エーカーずつ、草の生えたすき残しの畝によって細長い地条に仕切られた。[43]

My plou3pote shal be my pyk & putte at þe rotis,
And helpe my cultir to kerue & close þe forewis.
VII. 95—6

私の鋤の刃は錫杖となり、木の根を切って掘り出し、私の鋤先の草切り刃を助けて畑の畝を切り開き、それを仕切るであろう。

錫杖とは
Þat *penitencia* his pik he shulde pulsshe newe
V. 248

彼は〈償罪行為〉なる錫杖をあらたに磨きあげ

私の鋤については
Of preyours & of penaunce my plou3 shal ben hereaftir, VIII. 106

今後わが鋤は祈りと償罪の鋤[44]となろう。

とある。木の根を切って掘り出す仕事、未だ耕していないあぜを掘り起す仕事、畑の畝を切り開き半エーカーずつの地条に仕切る仕事など、開墾に従事する激しい骨の折れる筋肉労働が償罪生活の営みになると教える。種子を播く仕事や作物を植える仕事、家畜の駆使など農耕に従事する労働にも同じことがいわれる。またこの他の職種の場合にも

他の労務者たちも熱心に仕事に精出し、みんなそれぞれ自分なりに工夫してせっせと働き（Ⅶ・101―102）

〃熱心に〃〃精出して〃苦行になるようにして行えとすすめた。〃骨を折って働く toil〃という表現も償罪行為のものである。[45]

このように教えても、中には働かない連中が出てくる。作者の表現を用いれば詐欺師、ペテン師、のらくら者、ならず者、盗人、浮浪者、身体の屈強な乞食たちである。逃散の農奴のうちこのような徒に身を堕としていた連中が多かった。彼らは長い怠惰な暮らしの習慣から容易には抜け切れなかったであろう。盲のふりをしたり仮病を使って怠けようとする様子が七歌に描かれる。指導者ピアズが、どうしたら彼らを支配し、働かせることができるか知りたいと〈飢〉に相談する。それには彼らを不幸な状態にしておくことが彼らを従順にする方策で、食物が不足してくれば懸命に働き出すから与え過ぎないようにと具体的な諸注意がある。

「その時〈次善行〉は鞭で打ちたたくことに十分注意しなければならない（X・85）」とある。当時の手工業親方は、徒弟、職人と一緒に働いていた。彼はしばしば徒弟をなぐり、またときには職人をなぐった。[46] 人をなぐることは当時は誰でも行うことだったのである。[47] 断食の罰、懲らしめのむち[48]の懲罰は、実際にシトー会修道院内で行われていた。

シトー会修道院ではあらゆる種類の手仕事が彼らの天職であったから、労働の材料が用意されている荒地や沼地、谷間、森林など辺境の土地が求められ開墾されていった。次第にその場所と修道院との間の距離が開いて一日で往復がむつかしくなったとき、そこに納屋が建てられ、修道士たちは穀倉と修道院との生活を数週間ずつ交代で繰返すようになった。これが「穀倉」のシステムである。[49] 世俗を離

れた場所で隔離して労働に従事させることは、働く習慣のない者の矯正法としても効果があったにちがいない。六歌四〇行に野良着の身仕度をしたピアズが、「その場所を教えてあげよう」と一同を案内するが、それは何処か。未耕地は必要条件である。ラングランドは何処を「穀倉」に想定して書いたのであろうか。

当時の村落の地理的環境をみてみると、東部と中部イングランドの農業諸地域において普及していた荘園制度は、開放耕地の中央に、教区教会とマナーハウスをおいて、それをとり囲むように二〇〇名ないし三〇〇名が集まって村落がつくられていた。この開放耕地は半エーカーか、又は一エーカーずつの数百の地条に分たれていて、各農民は耕圃 field に分散している自分の保有地をもち、自由民もしくは農奴は一条以上いくつでも保有することができた。領主の直営地は村の別の地区にあるか、又は農民の保有地の間に分散していた。耕圃の外側は荒蕪地 waste で囲まれていた。その頃はまだブリテン島全体の半分を占めていた沼沢地とヒースの茂る荒野と森林があった。[50] ヒースの茂る荒地や森が「開墾」農地として耕作用に囲い込まれてあり、村落民はここから建築材木やたき木を採ったり、豚を放牧していた。[51]

ピアズが半エーカーの土地の耕作をさせるために一同を案内したのは、このような場所が考えられる。「公道の傍にある耕地（Ⅶ・3）」とはこの開放耕地と道をはさんだ処にあった「開墾」農地のことを指すのではないかと思われる。未耕地は農民たちの身近にあったことがこれで理解できよう。

悔悛の秘蹟の手順に従えば、こうして償罪を果たした者には、司祭から赦免が宣げられた。本来ならばこれで完了である。しかし作者はこれで終りとしていない。六歌全体で完徳の釈義がなされる。

ピアズは次のように言う。真理の住む城の門の処まで行って、「私は司祭に命ぜられた罪の償いをやりとげました（Ⅵ・85）」と言いなさい。しかしそれだけでは城の門は開かれない筈。たとえその中に入ることを許されたとしても罪源に気をつけねばならぬ。もし罪を一度でも一回でも少量でも犯したならば、「そのためにお前は追い出され、あの戸は閉ざされ、……お前が再度その中に入るには多分百年も後のこと（Ⅵ・98―101）」せっかく行った償罪行為も霧散して、もう二度と救ってもらえないのだという厳格な戒

律が言い渡される。ではどうすればよいかというところで、第三段階が考えられるのではないだろうか。

第三段階の教義は、やはり一歌にある。

私がさきに述べたように、完全（完徳）のうちに世を終る者は、確実に彼らの魂は、〈真理〉が聖三位一体にあり、すべての魂を王位につかせる天国へ昇って行くことでしょう。（I・120―122）

完徳の教えは、〝もし永遠の命を得たいと思うなら戒めを完全に守れ〟[52]が本来の形であるが、聖書を読めない者には十戒と七つの罪源を教え、〝天国へ入りたいのなら罪は一度も犯してはならぬ〟の形がとられている。[53]

古来より完徳を象徴するのは、ただひたすら神をのみ想い、一度の罪をも犯さなかったというヨブの信仰の姿勢とされており、その名が作品にも出てくる。[54]

それでは愚か者が罪を犯さずに生活するにはどうすればよいか。罪はすべて怠惰から派生するものである。一日中厳しく禁欲的に働いていれば他の罪を犯さずに済む、という考えがシトー会修道院にあった。[55]そこで完徳の生活の生きた見本として、勤勉に働いて見せる〝農夫ピアズ〟が示されているのではないだろうか。作者には、愚か者をキリスト教に改宗させるには、多くの説教によるよりも行為で示して導くのがよいとの考えがある。[56]実に多くの実例が諸聖人の生き方に見られる、[57]と言っている。しかし十四世紀後半のイングランドにおける無学な下層階級が、ヨブや諸聖人を手本とするにはその間にあまりに隔りがありすぎた。そこで〝農夫ピアズ〟という人物が身近なわかり易い見本として創られたのであろう。三、四世紀に、後に聖人とよばれるようになった人たちがキリストの生涯を模倣しようと荒野に入って行ったのと同じように、無学な下層階級にはピアズの生涯を模倣して生きよ、という作者の意図がある。このことはBテキストで補われた部分をみると理解し易い。[58]

Aテキストでも、完徳の生活の仕方がピアズ自身の言葉で示されている。

この四十年もの間、私はその方の下僕でした。あの方の種を播き、あの方の家畜を追い、あの方の穀物を育

て、家へ運び込み、溝を掘り、穴を掘り、命ぜられたことは何でもし、家内でも家外でも、あの方の利益のためばかりを考えてきました。(Ⅵ・30—34)

作者は、ピアズのこの姿勢で働くこと、自分の身体全部を生きた供え物として捧げよ、[59] ひたすら神を想い、自分の心に内なる神と直接触れ合って働け、これは神と霊的に一致することであるから祈禱する行為と同じことである、と教えた。

このように農夫ピアズを真似、ピアズと同じように行い、ピアズと同じように生涯を送るならば、死後、最後の審判日にピアズが得たのと同じ赦免が得られると教えているのである。即ちそれは八歌にある免償証の文句のとおりに成就することになった。

「カクテ善ヲ行イシ者ハ永遠ノ命ニ入リ、悪ヲ行イシ者ハ永遠ノ火ニ入ルベシ。」

(アタナシウス信経、第43条)

結び

以上まとめると、無学な下層階級が救われるには、民衆の中にある正直で、とくに両手を使って働く百姓や羊飼い、仕立屋や靴屋など職人、溝を掘ったり穴を掘ったりする労務者の生活が奨励された。こうした人々にむかい一貫して各々地元(教区)にとどまり、各自与えられている仕事(職業)に励めと説かれている。但し労働の意義は各段階で変っていく。

「肉体の段階」では、生活の糧を得るため両手を使って働け。これは生存のための勤労である。

「魂の段階」では、過去に犯した罪の償いのため骨を折って働け。これは償罪生活としての勤労である。

「霊の段階」では、未来に罪を犯さぬようひたすら神に祈って働け。これは礼拝行為としての勤労である。

そしてこの通りに進むと、まず肉体的なものから始まり、次に恩恵の指導で魂がしかるべき段階に進み、最後に霊によって完成する。この過程は、「ソトー会の計画(プログラム)」のとおりになっている。このようにして人々が身近にある労

働を手段に、各段階毎に織込まれた教えに従ってはじめ両手を、次に筋肉を、やがて身体全体を使って働くうちに、人間が陶冶され、魂が救済されていく方法が示された。本論ではM・ブルームフィールドが対象とした階層とは異るが[60]、無学な下層階級が完徳に至る比喩的テーマは、「勤労」ということになる。

当初、ラングランドが意図した愚か者の救済――彼らは荒野に育った野生動物のように粗野で無知文盲、迷信を信じる未信徒、魂は救われていない者たち――彼らをキリスト教徒に導くこと、未だ救いの道に入っていない者の魂を救済することはこのようにして果たされた。これら〝不正直で怠惰〟であったならず者は、〝正直で勤勉〟な耕作者に変えられた。正直で勤勉な〝農夫ピアズ〟になったのである。

当時は宗教界全般にわたり腐敗堕落がみられ、シトー会の諸修道院もまた例外ではなく、むしろ最も攻撃され敵の多い存在となっていた。幾世紀もの間シトー会の精神に従って勤勉に働けば働くほど、広大な土地の所有者になり巨大な富が蓄積されていたからである。ラングランドが借用したのはこの修道会がもっている規律と禁欲主義の理念であり、初期の精神である。また、ラングランドは愚か者の救済の場合にのみシトー会の方法を借用しているということであり、賢い者その他には又、ちがう修道会からちがった方法を借用していることを断っておかねばならない。

両手をつかって働けという労働の教えは、アウグスチヌスにまでさかのぼることができる[61]。その教えを農耕に適用したのがシトー会で、それをまたイングランドの民衆の生活の上に具体化してみせたのがラングランド、ということになる。

黒死病の流行後、「労働」は大きな社会的問題であった。ラングランドは勤労が、個人の魂にとって救いの手段であると同時に、それは社会共同体にとっても救いの手段になると考えたと思われる。

本論は、昭和五八年七月二日、明治学院大学で開かれた第三〇回中世英文学談話会において、田巻が口頭発表した原稿に加筆訂正をほどこしたものである。

注

(1) Morton W. Bloomfield, "*Piers Plowman* and Three

Grades of Chastity," *Anglia*, Lxxvi (1958), pp. 227—53.

(2) 前出のブルームフィールド論文の The idea of grades of perfection の要点を略記すると、marriage, widowhood and virginity; or chastity, continence and virginity; or later layman, prist and religious.

(3) Ibid., p. 227.

(4) Anna Baldwin, *The Theme of Government in Piers Plowman*. Cambridge: D. S. Brewer, 1981, p. 81.

(5) Ibid., p. 5.

(6) 中期英語では lewed, lered.

(7) アウグスチヌス、赤木善光訳「信の効用」、著作集四巻、教文館、一九七九年、五八頁。

(8) T. P. Dunning, *Piers Plowman; An Interpretation of the A-Text*, Dublin and Cork, 1937, p. 8.
G. W. Stone, "An Interpretation of the A-Text of *Piers Plowman*," *PMLA*, Liii (1938), pp. 656—77.

(9) 邦訳に池上忠弘、『農夫ピアズの幻想』、新泉社、一九七五年がある。本論の引用ではこれを使用する。

(10) 柴田忠作訳註、『農夫ピアースの夢』、東海大学出版会、昭和五六年。これはスキート版Bテキストの全訳である。

(11) 大塚久雄、『近代欧洲経済史序説』、岩波書店、一九七二年、一八三頁。
村川陽一郎、『ペスト大流行』(岩波新書) 一九八三年。

(12) G. M. Trevelyan, *English Social History*, London: Longman, Green & Co., 1944. 藤原浩、松浦高嶺共訳、『イギリス社会史1』、みすず書房、一九七一年、三五頁。(以下『社会史』と略記する)

(13) G・トレヴェリアン、前出、九六頁。

(14) G. M. Trevelyan, *History of England*, London; Longman, Green & Co., 1952. 大野真弓監訳、『イギリス史1』、みすず書房、一九七三年、一四三頁。(以下、『イギリス史』と略記する)

(15) 大塚久雄、前出、四四一頁。

(16) G・トレヴェリアン、『イギリス史』、一四四頁。

(17) B・XV・452

(18) B・XV・450

(19) 使徒以後だいたいカルケドン会議(四五一年)までの間の聖人を教父とよぶ。Aテキストに出てくるのは四大教父(ヒエロニムス、アンブロシウス、アウグスチヌス、グレゴリウス)、ベルナルドゥス、アルベルトゥス。

(20) ベルナルドゥス(一〇九〇—一一五三)。フランスのブ

ルゴーニュ地方、ディジョンに近いフォンテーヌ城の貴族の息子として生まれる。シトーのベネディクト会修道院に入り、後に分院を建てクレルヴォーと名づけ、その修道院長となる。模範的な修道生活を指導してシトー会を興隆させた。

(21) ベルナルド、野村良雄訳、『聖ベルナルド著作集』、中央出版社、昭和三九年、三三頁。

(22) 池田敏雄、『聖ベルナルド』、中央出版社、昭和五一年、三—四頁。

(23) ベルナルド、前出、五四頁。

(24) Earle E. Cairns, *Christianity through the Centuries*, Michigan, Grand Rapids, 1954. 邦訳聖書図書刊行会、『基督教全史』、いのちのことば社、一九五七年、一八八—九頁。

(25) 神秘主義ともよばれる。十四世紀にイングランド北部から東部にかけて幾人かの神秘主義者が現われた。Richard Rolle, Julian of Norwich, Walter Hilton など。

(26) R. W. Southern, *The Making of the Middle Ages*. London: Hutchinson, 1953. 森岡敬一郎、池上忠弘共訳、『中世の形成』、みすず書房、一九七八年、一三八頁。「肉体と魂と霊が秩序づけられその正当な場所に配置され、人それぞれの特質によって区別されたとき、人は自分自身を完全に知りはじめ、自覚が進むことによって神の認識に登りうるであろう。」

(27) ベルナルドゥスは上昇の過程をあらゆる場合に段階をもって説いている。諸説教集より抜粋すると、

「愛の段階　第一〜四段階」

「神への第一〜三段階（心をこめての愛→慎重な精神をこめての愛→力をこめての愛）」

「謙遜の諸段階（隣人への憐み→十字架上のキリストへの憐み→神への憐み）」

「回心の段階　一〜七の憐み」

「回心させる段階　第一〜三段階」

(28) アウグスチヌスはキリスト者の四段階（律法以前の状態、律法のもとにある状態、恩恵のもとにある状態、完全に満たされた平和の中にある状態）としている。アウグスチヌス、前出、三二三頁。

聖ベネディクトの『修道院規則』には十二段階が述べられている。十一世紀に聖アンセルムスがこの十二段階を作り直し、七段階にした。R・サザーン、前出、一八一頁。

神秘的体験の過程は、伝統的に三段階に分けられることが多かった。Richard Rolle, 奥田平八郎訳『愛の歌』、水

府出版、昭和五七年、二二一頁。

(29) J. S. Fletcher, *The Cistercians in Yorkshire*, London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1919, p. 12.

(30) D. Knowles, *Christian Monasticism*, London: George Weidenfeld & Nicolson, 1969. 邦訳朝倉文市『修道院』、平凡社、一九七二年、一〇四頁。

(31) 母修道院の大修院長が娘修道院を年に一回巡察すること。その際大修院長は、「愛の憲章」や他の規律により、十分な矯正と処罰をもって修院長や修道士を監督した。

(32) 娘修道院の修院長が、修道士たちのための告白集会へ年一回巡察すること。

(33) 規律上定められた修道士たちのための集会。毎日開かれた。そこで告解が行われ、修道士たちはこれを受けた。

(34) J. S. Fletcher, p. 11.

(35) D. Knowles, p. 101.

(36) D. Knowles, p. 131. G・トレヴェリアン、『イギリス史』、一七八頁。

(37) G・トレヴェリアン、『イギリス史』一七八頁。

(38) G・トレヴェリアン、『社会史』、四一頁。

(39) キリスト教で、生活や世界観に対する従来の態度を改め、信仰生活に入ろうという志向の転換を示す語。

(40) G・トレヴェリアン、『社会史』、四一頁。

(41) A・V・13。

(42) 〝半エーカーの土地の耕作〟については、柴田忠作氏による *Piers the Plowman* 研究、『農夫ピアースの夢』、前出、八一一—六頁に Carnegy, Chambers, Dunning の諸見解を引用した記述がある。

(43) G・トレヴェリアン、『イギリス史』、一七五頁。

(44) 本稿の論旨から少しそれるので引用を控えたが、Stephen A. Barney, "The Ploughshare of the Tongue: The Progress of a Symbol from the Bible to *Piers Plowman*." *Medieval Studies*, 35 (1973), pp. 261—93. は参考になる論文である。新約・旧約を含めて聖書から〝耕すこと〟のイメージ（イスラエル、又は人類の耕作者である神のように魂を耕すこと、聖書の言葉を世界に播くこと）を挙げ、『農夫ピアズ』の各所にどのように描かれているかを述べたものである。〝半エーカーの土地の耕作〟の場面については、霊的な労働者、恩寵の調達者としてピアズにアレゴリカルな意味をあてて読みとっている。

(45) Roger Opie, "Why Work", *History Today*, 33 (1983), p. 31.

(46) G・トレヴェリアン、『社会史』、三六頁。

(47) 「六日間 in ievi culpa とされ、その中二日はパンと水による懲罰」、今野国雄、「シトー会々憲〝カリタ・カリタ ーチス〟の成立とその試訳（二）」、『史学雑誌』六五―八号、五八（六六七）頁。

(48) ベルナルドゥスが甥ロベールに宛てた手紙に、「むちを加えない者は、その子を憎むのである。子を愛する者は、つとめてこれを懲らしめる（箴言13の14）」を引用して、シトーではそれが必要であることを訴えている。池田敏雄、『聖ベルナルド』、中央出版社、昭和五一年、一九頁。

(49) D・ノウルズ、前出、一〇二頁。

(50) G・トレヴェリアン、『イギリス史』、一四五―七頁。

(51) G・トレヴェリアン、『社会史』、二三―四頁。

(52) 完徳の教義は、マタイ福音書一九章一六―二一節。

(53) 作品中に頻出する、一ガロン、一ペニー、一ジル、一度、一人、一頭といった語はこれらをおろそかにしない完徳の思想の特徴を表わしている。

(54) A・XII・108。

(55) ベルナルドゥスの甥ロベールが、クレルヴォーを逃れて、もっと規律のゆるやかなクリュニー修道院に移ろうとしたとき、ベルナルドゥスが書き送った手紙の内容がこのことを伝えるので有名。「立上れ、立上って帯をしめ、怠け心を振りおとし、全身に力をこめ、両腕を動かし、握っている手を開き、何か必要な働きをせよ。……怠惰は食欲をへらし、勤労は満腹を恵む。」池田敏雄、前出、一九頁。

(56) B・XV・440―443

(57) B・XV・263―264

(58) 「まさにそのように農夫ピアズが精を出して耕作に励むのは、自分自身を彼に従う者たち〔はじめて手伝ってもらう場合は別だが〕のためであるが、それと同じように穀つぶしや売春宿の女どものためでもあるのだ。彼は一生懸命裏切り者のためにも耕すのだ。正しい正直者のためにいつもと同じように一心に働くように。」（B・XIX・432―436）

(59) 聖書の次の箇所に典拠がある。「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた聖なる供え物としてささげなさい。それがあなたがたのなすべき霊的な礼拝である。」（ローマ人への手紙12の1）

(60) M. W. Bloomfield, p. 227.

(61) 四一〇年頃のアウグスチヌスの *De Opere Monachorum*『修道僧の勤めについて』に出ており、以来、「両手を使って働らき、労働せよ」は中世でよく引用された。